



**辺境貴族の**  
**転生忍者は今日もひっそり**  
**暮らします。**

Henkyou  
kizoku no  
Tensei  
ninja

**2**

**空地 大乃**

Sorachi Daidai

Illustration **リッター**

紹介  
登場人物

CHARACTERS

ゼンデ

実力も人望もある冒険者。  
ただし、いつも全裸。  
家の中でも、外でも。

ミモザ

剣の道を志す少女。  
ジンのことを目の敵にしている。

カグヤ

和服に身を包んだ謎の少女。  
前世のジンと関係が……？

マグノリア

魔法が得意な不思議少女。  
言いたいことを  
ズバズバ言うタイプ。

?????

常にマグノリアに寄り添う  
蜥蜴(とかげ)。  
なぜか普通の人間には見えない。

エシコウ

森の大猿……が  
小さく変身した姿。  
ジンと女の子が大好き。

ジン

転生前は最強の忍者だった、  
本作の主人公。  
前世で習得した忍法を駆使して、  
異世界での第二の人生を  
気ままに満喫する。

## 第一章 転生忍者、大叔父と会う

俺、ジン・エイガは転生者だ。

前世では日ノ本という国で忍者として活動していた。そしてとある任務中、俺は命を賭して主人である姫様を守り、死んだ——はずだったが、何故か日ノ本とまったく異なる世界に転生することとなった。

こっちの世界で、俺には家族ができた。寡黙な父上と優しい母上に、俺を目の敵にしている兄貴のロイスである。

その兄貴はどうやら今度、魔法大会とやらに出るようだ。兄貴には俺と違って魔法の才能があるんだよな。絶対に大会で優勝してやる、とやる気満々だ。

魔法大会はラブル・エイガ・タラゼド伯爵が治めるタラードの町で行われるのだが、このタラゼド伯爵は俺から見ると大叔父という続柄にあたる。

そして今日、大叔父が我が家にやってくると執事のスワローから聞いた。突然手紙で報せがあったようだ。時期的に考えて、魔法大会と何か関係あるのかもしれない。

俺としては、大叔父とは正直あまり会いたくない。大叔父とは何度か会っていて、俺が生まれた

時にも立ち会っていた。勿論、向こうはその時から俺に意識があるなんて知らなかっただろうけど。

大叔父は魔力至上主義者だ。だから魔力が豊富な兄貴は可愛がっているが、魔力がゼロの俺のことはまるつきり毛嫌いしている。

しかし、会いたくないという理由で無視できるような相手ではない。向こうは伯爵。爵位で見れば男爵の父より上なのだから、失礼のないように丁寧に迎えないといけない。

ということで俺と兄貴、母上とスワローは現在、屋敷の外で大叔父の乗る馬車の到着を待っていた。

なお、いつも俺と一緒にいる狼のマガミは、一旦屋敷のメイドに預けてある。こういう場で動物を連れるのは、作法的にあまり好ましくないらしい。

兄貴は俺の隣で、今か今かとウズウズしながら馬車を待っている。兄貴は大叔父に懐いているのだ。

しばらく待っていると、大叔父の乗った馬車がやってきて、屋敷の前に停まった。赤い車体に、金で縁取りされた豪華な馬車だった。

あとでスワローに聞いた話だが、車輪にはスライムという粘液状の生物を加工した素材が使用され、衝撃を吸収しやすくなっているそうだ。そういった加工された車輪は、庶民ではなかなか手が届かない代物らしい。

そのまま大叔父が降りてくるかと思ったが、まず運転手が降りて馬車の横にやってきた。そして

扉を開け、靴を用意する。土足厳禁の馬車ってことか。まったく大したものだね。

続いて馬車から現れ、靴を履いてこちらに歩み寄ってくるのは、がっちり体型の男——大叔父だった。

褐色の肌で、肩幅が広い。角張った顔をしていて、髪は父上よりも赤くて癖が強かった。目つきはギラギラとしており、まるで猛獣のソレだ。

大叔父は背中に着けている赤いマントを靡かせ、しっかりと足取りで近づいてくる。詰め物入りのダブルレットと呼ばれる衣服の内側には、鎖帷子でも着装しているのだろう。俺は耳がいいから、鎖がわずかに擦れる音が聞こえた。

すると、兄貴が大叔父に駆け寄った。

「大叔父様！ お久しぶりでございます」

「おお、ロイスか。ふむ、しばらく見ない間に随分と大きくなったな。顔つきも大人びてきているそれで、どうだ。魔法は扱えるようになったか？」

「は、はい！ まだまだ練習中ではありますが、基本的な魔法なら一通りは。エイガ家の名に恥じないよう、毎日勉強も欠かしてありません！」

「うむ、そうかそうか。お前は生まれた時から魔力が高い。それだけ才能に恵まれているということだ。だが、驕ることなく今後も精進しろよ」

「はい！ ご期待に添えるよう頑張ります！」

やれやれ。

兄貴との話を終え、大叔父が歩みを進める。そして、俺の横を通りがかった。

まあ、挨拶はしておかないといけないだろう。

「大叔父様、ようこそおいでくださいました——」

「ふん、なんだお前は？ 私には貴様など知らんぞ？」

……まったく。そんな態度を取るのとはわかつてはいたけどさ。

すると、スワローが近づいてきて大叔父に告げる。

「……タラゼド卿。今ご挨拶されたのはジン坊ちゃまでございます」

「ジン？ ああ、エイガ家始まって以来の落ちこぼれとされた、魔力なしの出来損ないか。はは、まだ生きていたとは大したものだ」

そう言っ大叔父がこちらを見た。

その視線からは、温度がまるで感じられない。俺にまったく興味が……いや、それどころか忌々しい害虫め、とも思ってそうな、蔑んだ目だった。

差別的な男だ。こいつの顔を見ると、前世で忍者を「鼠」と軽蔑していた大名を思い出す。

父上は俺に対して無関心——最近はどうでもないが——だったけれど、大叔父はもっと酷い。すぐにでも俺をエイガ家から排除したいという気持ちが、表情に顕著に出ていた。

スワローは言葉を続ける。

「タラゼド卿、ジン坊ちゃまも大変成長しております。剣の稽古にも余念がなく、その腕は私も舌を巻くほどです」

「剣術など、エイガ家においてはなんの役にも立たぬ。魔法には期待できないからと、そんな道に縋る他ないとは、かえって哀れだな」

「……旦那様が中でお待ちです。どうぞこちらへ」

「ふん——」

スワローに案内され、大叔父は屋敷の中に入っいった。

スワローはこれ以上、俺と大叔父と一緒にいてはお互い不愉快になるだけと考えたのかもな。確かに実際その通りだ。

勿論俺だって今は貴族の息子だから、できるだけ失礼にはならないよう振る舞うつもりではいる。どうせ二三日もすればあいつは帰るのだし。

「大叔父様はよくわかってるな」

スワローと大叔父がいなくなったあと、兄貴が得意満面に語りだした。

「お前はどれだけ頑張ったところで、魔力なしの落ちこぼれだ。ここ最近剣術や猿回しで父様にアピールしているようだが、なんの意味もない。いくら取り入ろうとしても無駄なことだ」

「はは、やだな兄さん。僕はそんなことまったく考えていませんよ。エイガ家の将来を担うのは当然、魔力が高い兄さんなんですから」

俺が取り繕った口調で言うと、兄貴は面白くなさそうな顔をした。

「——お前のそういうところがムカつくんだよ。魔力もないくせに、余裕ぶってるその態度がな！」指を突きつけ、偉い形相で文句を言ってくる。

そして兄貴は、そのまま屋敷に戻っていった——



## 【ロイス視点】

大叔父様が我が家にやってきた。

大叔父様の爵位は父様より上の伯爵。貴族の通例として、エイガの家名は中間名とし、後ろに伯爵としての家名であるタラゼドが続く。ゆえに、大叔父様のフルネームはラブル・エイガ・タラゼドとなる。

大叔父様が伯爵位を賜れたのは、魔法士としての才覚は勿論のこと、数多の人脈を築き上げたのも大きい。エイガ家は多くの魔法士を輩出してきた家系だが、大叔父様は人脈を活かして数々の魔法士を仲介することで諸侯の信頼を得ていったのだ。

大叔父様によって大きな仕事に就くこととなった魔法士は多い。また、魔法士の間でも大叔父様

に認めていただくことがステータスになるという認識が広まっているのだとか。そういう意味では、将来立派な魔法士を目指す私にとっても大叔父様は大事な相手だ。

大叔父様ならきつとわかってくれるはず。あの卑怯な愚弟と私、どちらがエイガ家にふさわしい人物かを！

私は父様の部屋の前にやってきて、扉をノックした。そして返事を待たず、「失礼します」と一言述べて部屋に入る。

「なんだロイス？　今は叔父上と大事な話をしているのだぞ」

父様が窘めるように言ってきた。しかし、私にとっても大事なことだ。

すると、大叔父様が父様を手で制止する。

「まあよいではないか。ロイス、今丁度お前の話をしていたところだ。来年の魔法大会に出るつもりでいるようだな？　勿論その分の枠は確保しておこう。活躍を期待しているぞ」

「は、はい！　全身全霊で試合に臨ませていただきます！」

大叔父様が私に期待していると言ってくれた。当然、魔法大会では優勝するつもりだ。大叔父様も私の勝利を信じて疑っていないことだろう。

大叔父様は私の言葉を聞き、満足気に頷く。

「ほう、随分と難しい言葉を知っているじゃないか。魔法だけではなく学もあるとは、これからが楽しみだな。将来は領主になるであろうが、腕のいい魔法士になるならばその前に色々と経験を積

む必要がある。今後の成長次第では、この私がしっかり面倒を見てやるからな」

「はい！　ありがたき幸せ！」

やはり大叔父様は見る目がある。まあ、あんな愚弟よりも私の方が優れているのだから当然か。

「……ロイス、話はそれだけか？　それなら——」

「お待ちください！　実は弟のことで一つ、大叔父様のお耳に入れておきたいことがあります」

父様が話を打ち切ろうとしてきたので、私は語気を強めに本題に入らせてもらった。

「何？　あの出来損ないがどうかしたのか？」

弟と聞き、大叔父様が眉をひそめる。

大叔父様は私と同じく、この世界は魔法が全てと考えておいでだ。魔法の腕に長けた者こそが人の上に立つ資格があり、魔法を扱えない屑どもを導いてやるのが、我々のような人間の使命だと教えてくれたのは大叔父様だ。その大叔父様ならきつとわかってくれる。

父様は、大叔父様の発言に何故か険しい表情を見せている。父様だってあんな愚弟、家にいない方がいいとわかっているくせに。

「はい。実はあの愚弟が町の危機を救ったなどというでたらめな噂が広まっ——」

「ロイス！　その話は昨日結論が出たばかりであろう！」

「ヒッ！」

父様に怒鳴られ、思わず情けない声が出た。肩も震えた。

父様、どうして？　今までも不機嫌になった時はあつたけど、そんな大声を上げるようなことはなかった。

勿論、悪いのが自分だというのなら反省もする。だけど、愚弟の件に関して言えば私は何も悪くなんかない。おかしいのは父様の方だ。あんな奴が、あんな奴が……

「——サザン、どうした？　そのように血相など変えて。別に怒鳴らずともよいであろう。それにその話は私も興味がある」

「いえ叔父上。これは家族の問題です。叔父上に聞かせるようなものではない」

「この私が聞かせると言っているのだ」

私の目の前で父様と大叔父様のちよつとした言い合いが始まった。私としては、せっかく大叔父様が興味を持ってくれたのだから話を聞いてもらいたい。

「……ロイス、出ていきなさい」

「え？　しかし！」

しかし、父様はそれを許してくれなかった。納得ができず私は声を上げたが……

「いいから出ていくんだ！　私の言うことが聞けないのか！」

「……わかりました」

父様の有無を言わせない調子に、仕方なく部屋をあとにした。

父様は何故あそこまで怒ったのか。まるであいつの肩を持っているようじゃないか……

せっかく大叔父様にでたらめな噂をどうにかする相談ができると思ったのに。

私は自分の部屋に戻ったあと、悔しくて仕方なかった。

気を紛らわそうとしばらく机に向かって魔法書を読んでいたけれど、まったく頭に入らない。それからしばらくして、誰かが扉をノックした。続いて、ドア越しに声が聞こえてくる。

「ロイス、私だ。入ってもいいか？」

訪ねてきたのは大叔父様だった。

私は天の声にも等しく感じ、机から離れて急いで扉を開ける。

「大叔父様、どうぞ！」

大叔父様を部屋に招き入れたあと、私はここ最近あった出来事を包み隠さず話した。そう、あの愚弟が不当に持ち上げられていることも含めて全て――



「クウーンクウーン」

「はは、まったく甘えん坊だなこいつめ！」

「ガウガウ！」

大叔父を迎えたあと、俺は昼食を食べてから中庭でマガミと遊んでいた。

マガミが嬉しそうに体をくっつけてくるのでもふもふしていると、ゴロンと仰向けになり舌を出して甘えた声で鳴く。

大叔父の出迎えもあって午前中は構ってやれなかったからな。それで寂しかったんだろう。

「まったく、可愛いけどあまり甘えん坊だと強い忍狼にんろうになれないぞ？」

「ガウガウ！」

俺がなんの気なしに口にすると、マガミが起き上がり表情を引き締めた。うーん、もしかして気にしているのかな？

「マガミ、今のは本気じゃないぞ。お前ができる子なのは十分――」

「ガウ！」

次の瞬間、俺は予想だにしない光景を見た。

なんと、マガミが庭の端から端までを一瞬で往復したのだ。うちの中庭は二十メートル四方程度だが、それほどの距離を風のように走り抜けるとは。

「ガウッ」

そしてドヤ顔を見せる。いや、しかしこれは驚いた。

「凄いなマガミ！ お前いつのまにこんな技を？」

「ガウガウ♪」

俺が褒めると尻尾をふりふりさせて機嫌よく吠えた。

なるほど、密かに練習していたのか。

マガミは風属性の魔法を使える。今のは風の力で劇的に移動速度を速めたに違いない。

さつきはあ言ったが、マガミもいよいよ忍狼っぽくなってきたじゃないか。

「偉いぞ。この調子でどんどん頑張ろうな」

「ガウッ！」

得意げに顎を上げるマガミ。その姿も可愛い。よし、ご褒美にたっふりもふってやろう。

「ガウウウウウ」

「はは、嬉しいかこいつめ」

たっふり撫で回したあと、俺は真剣な表情をしてマガミに話す。

「ただし、この前使った風断爪の技と同じく、人目のあるところで魔法を使うのは控えるんだぞ？」

「ガウ！」

マガミは勿論！ とでも答えるように真剣な目で吠えた。

下手をする、悪目立ちしかねないからな。それに、今は見られたら特に厄介なことになりそうな相手も屋敷にいる。

そんなことを思っていたら、面倒なことにその張本人——大叔父が中庭にやってきた。

「まさか銀狼がこの屋敷にいたとはな」

やはりか。気配や足音で近づいてきていることはわかっていたが……

しかし、何故わざわざ？ こいつが俺に話しかけてくる理由なんてないだろうに。

大叔父は高圧的に尋ねてくる。

「その狼、まさか魔獣か？ 貴様、そいつはどうした。答えよ」

随分と偉そうだな……まったく。

仕方ないので、俺は大叔父を見て説明した。

「……森で怪我をしているところを助けたら、懐いてくれたのです。魔獣というのはわかりませんが、父様の許可をいただいて飼っています。今は僕にとっての大事な友達ですよ」

「狼が友達だと？ ふん、馬鹿なことを。だが、貴様などに懐くならば流石に魔獣ではないか。魔力のない貴様に、従魔契約を結べるわけがないからな」

従魔契約？ そんなものがあるのか。

「しかし魔力も備わっていない出来損ないとは、本当に哀れなものだ。狼が唯一の友とはな」

大叔父が蔑むような目を向けて言う。遠慮の欠片も感じられない直接的な物言いは、いつも清々しいな。というか、別にマガミ以外にも友達はいろんなのだが。

「ガル——」

「待て、この方は僕の大叔父だ。だから、な？」

「クウーン……」

マガミの表情が陰しかったので、そう宥めておく。俺を悪く言っているのが理解できたのだろう

が、牙を剥くのはまずい。それに一応は血縁者だ。

「ほう、よく飼いなされているじゃないか。ゴミでも多少は役立つこともあるものだ。ふむ、しかし銀狼とは珍しい……よし、その獣は特別に私が引き取ってやろう。金貨一枚でいいな？」

そう言って大叔父が指で金貨をこちらに弾き飛ばしてきた。

だが俺は、飛んできたそれを受け取らずに指で弾き返す。

大叔父は掌で受け止め、眉間にしわを寄せた。

「なんだ？ 生意気にも一枚じゃ不服なのか？」

「何枚でも一緒です。いくらお金を積まれても、大事な友達を売ったりしない」

「……何？」

大叔父が目を細め、俺を見下ろしてきた。何も答えないでいると、中庭に沈黙が訪れる。

「——用がそれだけなら、僕はもう行きますね。マガミ」

「ガウ……」

先に沈黙を破ったのは俺だった。こんな奴と話を続けていても仕方ない。マガミも大叔父の態度をよくは思っただろう。

さっさとその場を離れようと、マガミを連れて踵を返す。

「待て、まだ話は終わっていないぞ」

「何度言われてもマガミと別れるつもりはありませんよ」

大叔父が引き止めてきたが、構わず歩く。こればかりは何を言われても譲る気はない。

「ふん、そっちの狼はとりあえずいい。それよりも貴様、妙な猿を手懐けた程度で随分と調子に乗っているそうだな？」

俺はその言葉を聞いて、足を止めて振り返る。

妙な猿？ エンコウのことか……どこで聞きつけたか知らないが、よく知っていたな。

「先日、エガの町の近くの森にゴブリンが大量出現したそうだな。その騒ぎはどうやらお前が解決したことになるらしいが……まったく、この領地には馬鹿しかいないのか？ 魔力のない出来損ないの穀潰しに、そんな真似ができるわけないだろう」

大叔父は俺を指差し疑心に満ちた目を向けてきた。

隣のマガミは目つきを鋭くさせているものの、唸るのはこらえている。俺の言いつけを守っているのだ。そうでなければ、とくに飛びかかっていただろう。

「そのことなら、あなたの言う通りですよ。ゴブリン事件を解決したのは森で暮らしていた猿たちです。猿たちが僕に懐いてくれていたのは本当ですが、僕がやったことではない」

実際のところは俺がゴブリンロードを倒して騒ぎを治めたというのが事実なんだが、父上には大猿のエンコウのおかげだと伝えてある。当然、こいつにも真実を伝えるわけにはいかない。

しかし、この男はわざわざそんなことを確認に来たのか？ 顔つきを見ると、それだけではない気もする。

すると、大叔父はこんなことを言いだした。

「なんだ、わかってるじゃないか。なら話は早い。すぐにでも町に行き、自分が嘘を吹聴したと自状し、その全てが本当は兄のロイスの功績だったと伝えるがいい。くだらない嫉妬で、ついでたらめを言ってしまったとな」

は？ こいつ、わけのわからないことを……

「仰おしやっている意味がわかりません。それに町で知られていることは父様から周知されたのです。僕がどうこうできる話ではない」

いささか呆れてしまったが、とにかく俺はそう言った。

だが大叔父はそれを鼻で笑う。

「ロイスから聞いたが、貴様は随分と町の人間に慕したわれているそうじゃないか。貴様は一族の恥晒はじさらしだが、そういうことであるなら貴様の話に愚民も耳を貸すことだろう」

「……そんなことをしても兄にいいことはないかと思われませんが。兄はゴ布林事件を解決していないのですから、そのこと自体が嘘になる」

ゴ布林ロードは俺からすれば大したことのない相手だが、兄貴がどうこうできる魔物ではない。鼻息一つで木こっ端微塵はみじんにされてもおかしくないレベルだ。仮に俺が町の人々に言ったとしても、すぐにメッキが剥はがれてろくなことになるだろう。

「だからなんだ？ たとえ事実でなくてもロイスの功績にすれば、ロイスのブランド……つまり魔

法士としての価値が上がる」

「価値だって？」

つい素の口調で聞いてしまったが、大叔父は特に気にすることなく話を続ける。

「そうだ。たとえばここに、まったく同じ素材・質の剣が二本あったとする。だが、一本は誰が打ったかもわからないような無銘むめいの剣。もう一本は名高い鍛冶師かじしの銘が刻まれた剣だ。これらの価値は同じだと思うか？」

「……見るべき人が見れば同じだと思いますが」

「ふん、可愛げのない答えだ。実際はそうだが、多くの人間にとっては違う。名高い鍛冶師の銘が入った剣の方をありがたがるのだ。もつと言うと、銘さえ刻まれていれば質が悪くても高値がつく。これがブランドの力だ。どこの馬の骨ともわからないような無名の鍛冶師が打った剣など、いくら質がよくても誰も見向きはしない。世の中とはそういうものだ」

随分と得意げに話すが、俺としてはどうでもいい話だ。

「それが今回のことと、どういう関係が？」

「ここまで言っただけならめとは、やはり落ちこぼれは頭の出来も残念なようだ。ここという剣とはロイスのことだ。ロイスには将来のため、幼くしてゴ布林事件を解決したという銘——つまりブランドが必要なのだ。生まれた時から魔力がないゴミのごとき貴様にはなく、な」

俺に指を突きつけながらそんなことを言った。

まったくろくでもない男だ。こんなのと血の繋がりがあると思うと、うんざりする。

(マガミ、こらえろよ)

「……ウウ」

唇をなるべく動かさず、マガミにそう伝えた。

マガミは賢い狼だから、大叔父が俺に向けて吐き出している言葉の意味をある程度理解している。今はなんとか耐えているが、眼光は鋭い。敵意を隠し切るのとはなかなか難しそうだ。

「いいか？ お前があげた功績など、せいぜい狭苦しい町の下民をほんの少し喜ばせる程度のものでしかない。だが、これがロイスの功績となればどうなるか？ たちまち噂はこの町だけでは留まらなくなる。流石はエイガ家の血統だと、周辺の地にも知れ渡る。王都にだって届くかもしれない。勿論それは私が協力してこそだと思うが、とにかくそこから生み出される利益を考えれば、貴様の功績にしておく意味などまるでないことに気がつくだろう」

つまりこいつは、兄貴を利用して自分の名も上げたいのだろう。自分の協力が必要だと言っているし、実にわかりやすい。

兄貴は随分と大叔父を慕っているが、こいつ自身は兄貴を親族としてではなく、駒としてしか見ていない気がする。

「さあ、わかったら私の言う通りに動くがいい」

「お断りさせていただきます。どちらにせよ、僕の判断だけでどうこうできる話じゃない」

「お前の判断ではない、私の判断だ。勘違いするなよ、落ちこぼれの出来損ないが。所詮貴様などお情けで生かされているに過ぎないことを忘れるな」

上から目線で偉そうに語る奴だ。正直相手するのも面倒だな。

俺としては別に功績なんかに興味はないのでなかったことにされてもいいが、かと言ってこいつの思い通りになるのは癪である。

大叔父の話に辟易としていると、スワローが中庭にやってきた。その目つきはどことなく険しい。

「……少々言葉が過ぎるのではありませんか？ タラゼド卿」

「何？ ……スワローか。言葉が過ぎるとは、この私に対して言っているのか？ お前は一体どの立場からそのような物言いをしている？」

スワローに顔を向け、大叔父が厳しい口調で言う。

「……出すぎた真似をして申し訳ありません。お二人の会話が耳に届いたもので」

「ふん、盗み聞きとは随分と騷の行き届いた執事もいたものだ」

大叔父がそんな皮肉を口にしたが、スワローは凜とした佇まいで言葉を続ける。

「あれだけの大声ならば、ある程度離れていても聞こえてきます。最初から聞いていたわけではありませんが、わずかな内容だけでも大体のことはわかりましたので」

「……ふん。それで、話が聞こえたからなんだというのだ？」

「ジン坊ちゃまのことです。私はロイス坊ちゃまもジン坊ちゃまも幼少の頃より等しく見てきて、

兄弟それぞれが違った才能を持ち合わせていると考えております。ロイス坊ちゃまの魔法の才は、確かに非凡なものを感じます。しかし、ジン坊ちゃまも人より優れた才能を持っております」

「このゴミに才能だと？ 貴様は見る目がないな」

大叔父は視線を俺に移し、小馬鹿にしたように鼻で笑った。

「――タラゼド卿、ジン坊ちゃまには類稀なる剣の才能がございます。元騎士の私から見ても、それは間違いありません。その上大変な努力家でもあります。才能に溺れる者は数多くいれど、努力を積み重ねられる者は希少です。それは一つの価値と言えませんか？」

スワローはそういう風に俺のことを思っていてくれたのか。

俺がこの世界の剣術を練習しているのは単純に興味があっただけけれど、純粋に嬉しい。

「ふん、そんなお遊戯になど、なんの価値もない。この世界で最も信頼されるのは魔法であり、魔法士の力だ。貴様は魔法の才がなく剣一本で成り上がってきたようだからこいつを庇いたくなるのだろうが、忘れるなよ。騎士が活躍できているのも魔法士がいてこそだ」

大叔父はどうしても俺を下に見たいようだな。

スワローは大叔父をしっかりと見据え、凜とした声で言い放つ。

「……どちらがよくてどちらが悪いなど、私ごとが言うことではありません。ですが魔法士と騎士、そのどちらが欠けても駄目なのだと愚考しております」

「……ふん。だが騎士を辞めた貴様は結局、男爵家の執事などという小さな身分に収まっているだ

けではないか。魔法の才があれば、もっと素晴らしい道を歩めたとは思わぬか？」

「私は十分に満足しております」

「満足か。そうは思えんがな。どうだ？ 貴様もいい加減、女としての幸せを考えてみるといい。

お前ほどの器量ならば気に入る貴族も多からう。私が面倒を見てやるぞ？」

「丁重にお断りさせていただきます。私は執事の仕事に誇りを持っておりますので」

「誇りだと？ 女の分際で生意気な。貴様は女らしく尻でも振って男に媚びていれば――ッ!？」

その時、大叔父がギョッとした顔で俺の方を振り向いた。

スワローに対する暴言が酷かったのでつい殺気を向けてしまった。案外ばれないかとも思ったが、どうやらそこまで鈍くなかったか――

すると、マガミが大叔父を睨んで唸り声を上げる。

「グルルルウウウウウウ！」

「……狼か。ふん、何が大人しいだ。そこらの野犬と変わらぬ顔をしているではないか。そんなものを放っておくな。鎖にでも繋いでおけ!」

大叔父が怒鳴り散らす。殺気をマガミのものと判断したか。

それにしても、さっきまで引き取る気でいたくせに、少しでも敵意が向けば掌返しとは。器が知れるというものだ。

俺は頭を下げて、大叔父に告げる。

「申し訳ありません、大叔父様。マガミは普段は大人しく、唸り声を上げたりしないのですが、どうやら大叔父様にだけは別なようです」

「なんだと？」

大叔父の眉間に深いしわが刻まれた。俺の皮肉が効いたようだ。

その時、一人のメイドが中庭にやってきて、顔を強張らせながら大叔父に言う。

「あ、あの、タラゼド卿。だ、旦那様より部屋まで来ていただきたいと言伝を受けたのですが……」  
声が震えている。俺たちの剣呑な空気をを感じ取ったのだろうか……悪いことをしたかな。

「……わかった。ジン、貴様のことはしっかりあいつと話させてもらうからな」

そう言い残し、大叔父は俺たちの前から立ち去った。

よかった、これ以上あいつと話していたら、俺も抑え切れていたかわからない。

「……ジン坊ちゃま、申し訳ありませんでした。差し出がましい真似を」

大叔父の姿が見えなくなったあと、スワローが頭を下げてきた。彼女に非はないのだから謝罪など不要だろう。

「謝る必要はないさ。スワローは僕を思ってくれたんだ。むしろ、こちらこそありがとう」

そう伝えるとスワローがニコリと微笑んだ。

「……そう言っていたけると、嬉しく思います」

「スワローは、うちにとってかけがえのない存在だよ。スワローほどの執事は他にいない。あんな

奴の言うことなんて気にする必要ないさ」

俺は本心を伝えた。大叔父なんかの言葉を気にするのは、馬鹿らしいことだ。

「まあ、あんな奴だなんて。タラゼド卿に聞かれでもしたら、またご面倒なことになりますよ」

「はは、違うないね。ならこれは二人だけの秘密で」

俺は口の前で人差し指を立ててみせた。

「ふふっ、そうですね」

スワローも口元に人差し指を添え、おかしそうに笑う。

そこにマガミの鳴き声加わった。

「ガウガウ！」

「あ、そうですね。二人ではありませんでした」

「ガウ！」

マガミが同意するように吠ええると、スワローは改めていい笑顔を見せてくれた。

マガミはスワローと俺の周りを駆け回っている。可愛い奴め。

しかし、マガミといえば大叔父は気になることを言っていたな……

「そういえばスワロー。大叔父様がマガミを魔獣と思ったらしくて、従魔契約がどうか言っていたんだけど……何か知ってる？」

「はい。従魔契約というのは、儀式を通して魔物や魔獣と契約を結び、主従関係を築くことをいい

ます。魔物や魔獣と契約した者は、魔物使いや魔獣使いと呼ばれますね」

そうなんだ。しかし流石、スワローは物知りだな。

「契約を結ぶと何かいいことがあるの？」

「従魔は主の命令を聞くようになりますから、強力な魔物や魔獣を従魔にすればそれだけでもかなりの利点ですね。さらに、従魔が特殊な力を持つ種の場合、主は従魔の力を使用できるようになります。たとえば火の属性を持つ存在を従魔にすると、契約前には使えなかった火属性の魔法が使えるようになるんです」

なるほどね。忍法・口寄せに近いけど、相手の力を主が使えるという点が異なるか。

「従魔契約というのはやっぱ難しいのかな？」

「難易度は高いですね。従魔として契約を結ぶには、まず対象に自分の力を認めさせる必要がありますから。また、契約のための儀式にはかなりの魔力を消費します」

「ああ、それなら僕には無理だね」

「そうですね……魔力という点では難しいかと。ただ——」

そこまで口にし、スワローは若干の迷いのある表情を見せた。

「どうしたの？」

「いえ、その……魔獣や魔物と心を通わせることで、儀式をせずとも従魔契約を結べた者がいたという逸話が残っているのです。そのため魔力がなくても契約が結べる可能性もないとは言えませ

が、信憑性<sup>しんぽうせい</sup>に欠ける夢物語のようなもので」

なるほど。スワローとしては、俺をがっかりさせたくないと思ってそんなことを教えてくれたのかも知れない。とはいえ、余計な希望を持たせてもよくないとも考えてためらったのだろう。

「ありがとうスワロー。凄く参考になったよ」

「そう言っていただけだと嬉しいですが……ただ、ジン坊ちゃまはとても動物に懐かれる体質のようです。坊ちゃまであれば、マガミやエンコウを従魔にできても不思議ではないと私は思います」

「はは、ありがとうねスワロー」

「ガウガウ！」

俺はマガミをもふもふしながらお礼を言った。マガミは嬉しそうに尻尾<sup>しっぽ</sup>をパタパタさせている。しかし、従魔契約か——何かの役には立つかもしれないから心に留めておくとするかな。



### 【サザン・エイガ視点】

私はサザン・エイガ。エイガ家の現当主である。

午前中に我が家へやってきた叔父のタラゼド卿には、エイガ家の治めるエガの町で開く、魔法大

会の事前試合についての話を聞いてもらうつもりだった。この事前試合で優勝を収めた者は、タラードの町で行われる大会の予選に出ることができる。

一方、貴族であれば事前試合に出る必要はなく、身分が高ければ予選も免除される。

ロイスは叔父に目をかけられているため、予選は免除されるのだろう。だが私は、ロイスのためにも予選からの参加にさせた方が望ましいと思っている。そのことを話すためメイドに叔父を呼びに行かせたが、正直に言って不安だ。叔父は予選から参加させることを恥と思う人間である。私の考えを話したらどう受け止められるか——そんなことを思いつつ待っていると、叔父が部屋にやってきた。メイドから話を聞いたのだろう。

だが、叔父の顔を見て私は不安を覚えた。妙に機嫌の悪そうな顔をしている。

「叔父上、いかがなさいましたか？」

「どの口がそれを言うのか。まったくお前は、執事とあの出来損ないにどんな躰をしているんだ？」急にそんなことを言われても困るが、とにかく返答する。

「スワローはよくやってくれています。出来損ないとは……まさかジンのことでしょうか？ ジンに関しては、人様に迷惑をかけるような真似はさせていないつもりですが」

「ふん。貴様がそんなことだからつけあがるのだ。まあいい。まずは私から話がある。今すぐあのろくでなしの功績を撤回しろ。そしてゴ布林事件を解決したのはロイスだったと喧伝するのだ」

「……仰っている意味が少々わかりかねます」

「やれやれ。貴様までそんなことを抜かすか？ まさか貴様、あの屑に肩入れしているわけではあるまいな？」

「そもそも、屑と言われるような者は我が家にはおりません」

「何？」

叔父がギロリと睨みを利かせてきた。

確かにジンの魔力はゼロだ。魔法が全てであるエイガ家においては、落ちこぼれと呼ばれても仕方なくもある。

だが、それでも屑呼ばわりを許すわけにはいかない。相手がたとえ叔父であっても——

「魔力のない者を屑と呼んで何が悪い？ あんなエイガ家の恥晒しの名など、呼ぶだけで気持ちが悪くなる。口が腐るというものだ。とにかく、あんなゴミのおかげだなどという噂が立つても、百害あって一利なしだ。とっとと取り消してロイスの功績にしろ」

「……あれがジンのやったことではないとは、本人も言っています。しかし、ゴ布林ロードを退治した大猿がジンに懐いていたのは事実。そのことは町でも知られており、結果的にジンの力と見ている人間がいるという話なのです。それを今更に取り消すというのは無茶な話かと」

「……ゴ布林ロード？ それに大猿だと？ なんだそれは、聞いてないぞ」

叔父が怪訝そうに眉を寄せた。

聞いてない、か。そもそも私はこの件について話していないが、一体誰から聞いたのか。

私はゴ布林事件のあらましを叔父に話した。

「……つまり、大猿がゴ布林ロードを倒し、結果的に騒ぎが沈静化したということか。それで、その大猿はなんだ？ まさか魔獣か？」

「——それは定かではありません」

「は？ 何を呑気なことを。早急に調べ上げ、魔獣であればとっと捕らえるべきだろう！」

「今もお話ししましたが、大猿のエンコウは非常にジンに懐いており、他の猿も現在は人々の助けになっております。捕まえる理由がありません」

「そんな悠長なことを言っても、もし何かあったらどう責任を取るつもりだ！」

「その時は領主としての務めを果たします。とにかく、これはエイガ男爵領内の問題ですので」

「そこはつきりと言わせてもらった。いくら叔父が伯爵と言えど、他家の領地についてとやかく指図する資格はない。」

「……生意気な口を叩きおつて。とにかく、どんな手を使ってもいい。ゴ布林ロードを倒したのはロイスということにしろ。その方が外聞がいいし、ロイスが魔法大会でいい成績を残して魔法学園に入ったあと、ゴ布林ロードを倒したという名声があれば何かと有利になるしな」

「……お言葉を返すようですが、そのような真似をしてもロイスのためになるとは思えません」

「ロイスのため？ お前は馬鹿か？ ロイスではなく、エイガ家のためになるのだ」

「それならなおさらです。ロイスには確かに才能があります。しかし、まだまだ未熟でゴ布林

ロードを倒せるほどの腕はなく、功績に見合った器にもなっていない。むしろそのような名声は、ロイスにとって悪影響になります」

「ふん、だからなんだ？ 器なんてものは私の方でどうとでも偽装できる。今は力が足りなくてもそれなりに体裁を整えれば十分だ。あとはこっちでなんとかしよう」

——叔父は、確かにエイガ家の繁栄に一役買ってくれた人ではある。だが、そのやり方を私はあまり好ましく思っていなかった。その考えは今、彼の話を聞いて確かなものになっている。

「……とにかく、その話はお断りいたします。それとロイスの件ですが、今も言ったようにまだまだあの子は未熟。ゆえに大会についても予選からの参加とさせていただきます。私が叔父上をお呼びしたのはそのことをお伝えするためでしたので」

「何？」

叔父の威圧が高まった。私を見る目に力がこもっている。

「この私の話を勝手に打ち切って自分の用件だけを一方的に伝えるとは、あの泣き虫のお前が随分と偉くなったものだな」

「くっ！」

空気がビリビリとざわめきだし、部屋が家具が震えた。

これは威圧に魔力を込めた、魔圧——

「そういうば、お前もエイガ家の中では決して出来がよくなかったな。だからお前は男爵止まり

だった」

叔父は魔圧をまとわせたまま、話を続ける。

「エイガの家名しか持たためものには二種類いる。一つは王宮や有力貴族に仕える魔法士となった優秀な人間。もう一つはエイガ家の始まりの地であるこの男爵領に居残り続ける弱者。先祖代々の土地を守り続けると言えば格好はつくが、要は外に出ることもできなかった脆弱な魔法士の流刑地みたいなものだろう、ここは？」

「そのような考えをお持ちなのは、あなただけです。私は領地を守る責務に誇りを持っている！」

「ほう、一丁前な口を聞くようになったじゃないか。それで、今のお前の魔力はいくつだ？」

「……五百」

「五百か！ それは大したもんだ。生まれた時は五十だったか？ 平民からすればそれなりに高いが、エイガ家では及第点とはとても言えないものだった。ロイスは誕生時点で百五十だったな。お前みたいのから生まれたにはいい出来だ」

叔父はニヤリと笑った。

「なあと、五百は本当に大したもんさ。私の持つ魔力の二割程度もあるのだからな」

「……………」

魔圧が高まり、私は返す言葉を失う。

すると、叔父の背中から鋼鉄の腕が伸び、私の頭に鉄の掌が置かれた。

『鉄血の魔導師』——その力は未だ健在ということか……

だが、ここまであからさまに恫喝めいた行為に訴えてくるとは……

「さて、お前にもう一度だけ聞いてやる。ゴブリンの件は、ロイスの功績にしろ。わかったな？」

私は断ろうとしたが、言葉が出てこなかった。

圧倒的な魔力の差は、こうまで人の気持ちを折るものなのか？ あまりに自分が不甲斐ない——

「恐れ入ります。失礼してよろしいでしょうか？」

「……スワローか？」

だがそこに、扉をノックする音と私が信頼を置く執事の声。

「駄目だ。今は私がこいつと話をしている」

叔父がそう扉の向こうに返事したが——

「だからこそです。タラゼド卿にも関係することゆえ、どうか入室を許可いただけませんか？」

返ってきたスワローの声に、叔父は怪訝な顔を見せながらも頷いた。

それを見て、私は言う。

「許可する。入りなさい」

「失礼します」

スワローが入ってくると、叔父の視線が私から彼女に移った。

「それで、なんの話だ？」

叔父の主導で話が振られた。

スワローは一旦瞑目する。叔父の背中からは腕が伸びたままだ。それにもかかわらず、まったく動揺を見せない。大した胆力だ。大の男ですら、この魔法と魔圧には恐れ戦くというのに。

スワローは目を開き、叔父に視線を合わせ語りだした。

「タラゼド卿はどうやら、ゴ布林ロードを倒したことをロイス坊ちやまの功績としたいようですが、それはやめた方がよろしいのではとご忠告に上がりました」

すると、叔父は不機嫌そうに顔をしかめる。

「またそれが。貴様といいサザンといい、揃いも揃ってそんなにもあの出来損ないの肩を持ちたいのか？ それに一体なんの意味がある」

「私は出来損ないなどと思いませんが、それは一旦置いておくとしましょう。問題は、ロイス坊ちやまにはそれだけの力がないということです」

「そんなのはここにいるサザンからも聞いた。だがそれがどうした？ そんなもの——」

「兵が見ております」

「何？ 兵だと？」

叔父の表情に変化が見られた。訝しげに目を細めている。

「ロイス坊ちやまはゴ布林討伐作戦において、補助の役割を与えられて同行しておりました。そのため、当家の兵たちもロイス坊ちやまの戦いぶりを見ております。ゆえに、ゴ布林ロードを倒

せるだけの実力が備わっていないことは、兵たちがよくわかっています」

「……チッ。ロイスめ、そのことも黙っていたか。だが、そんなものは兵に口止めでもなんでもしておけばいいことだろう」

「それは正直難しいかと」

「何故だ！」

「ロイス坊ちやまは作戦においてミスを犯しており、兵からの心証があまりよくありません。そんな中でロイス坊ちやまがゴ布林ロードを倒したという話がまかり通ってしまえば、兵たちの間に不満が募り余計な反発を生みます。エイガ家にとってもロイス坊ちやまにとっても、よい影響を与えられるとはとても思えません」

「……」

叔父が顎に手を添え、黙考している。

「どうやらタラゼド卿はロイス坊ちやまからお話を聞かれたご様子。しかし、そこまでタラゼド卿に伝えていなかったようですね」

「……あいつめ」

「ですが、どうかご容赦を。ロイス坊ちやまはタラゼド卿を慕っておいでですし、褒められたいと考えられたのでしょう。才能があるとはいえ、まだまだ子どもですから」

「……しかし、このままではあの才能の欠片もない弟がやったことのように思われるだろう」

「確かにジン坊ちゃまを讀<sup>た</sup>える声もありますが、しかし多くの民はゴブリンロードを倒したのは大猿だと認識しております。ジン坊ちゃまは領民から慕われている一方、魔力がないことを誰もが知っていますから、噂が広く知れ渡ることはないでしょう」

「一方、ロイス坊ちゃまはゴブリンの件でミスしたものの、致命的なものではございません。先日の汚名は、次の魔法大会で活躍することで返上されるでしょう。身の丈に合わない手柄を急いで授けるよりも、来たる時を待ち、ふさわしい場で名声を上げた方が効果的かと思われます」

「……それがお前が言いたかった意見か？」

「はい。左様でございます」

「そうか。なるほど……ふはは、ははははッ——フンッ！」

——ドゴオオオオオオオオオオ——

「か、壁が……」

叔父の背中から伸びた鉄の腕が、スワローのすぐ横を通り過ぎ、部屋の壁を破壊した。くっ、誰が直すと思っているのか！

だが、スワローは表情をまったく変えなかった。それを見て、叔父が言う。

「眉一つ動かさんか——」

「伯爵ともあろう方が、短気を起こすとも思えませんので」

「小生意気な女だが……こんな小さな領地の執事しておくには惜しいな。私の下へ来い。可愛がってやるぞ」

「丁重にお断り申し上げます」

「……フン。気に食わんが、まあいい。この壁に免じて、今回のところは目に見てやるう」

「それでは困ります。壁は直していただかないと」

その場は丸く収まるかと思ったが、スワローは豪胆なことに、きっぱりと修理を求めた。

「……この私にそこまで言えるとはな。ああわかった。修繕費程度、いくらでも請求するがいい」  
その時、私の頭に一つの考えがよぎった。

「叔父上、壁のついでに一つ頼みがあります」

「何？……申してみよ」

「ジンを武術大会に出したいと考えています。許可をいただけますか」

タラードの町では魔法大会と同時に、武術大会も開催される。武術大会で優秀な成績を残せば、騎士学園に入学することができるのだ。

「武術大会だと？」

叔父が私を振り向いた。厳しい目をして睨んできている。

「貴様、本当に愚か者になったのではあるまいな。私が出来損ないのために何かすると思うか？」

「……確かにジンには魔力がない。魔法の才能は絶望的と見ていいでしょう」

「貴様の息子だからではないのか？」  
叔父が蔑みの目を向け言ってきた。

私はエイガ家においては出来がいいとは言えなかった。叔父は暗に私のせいでジンは落ちこぼれたのだと言っているのだらう。実際、その通りではないかと考えたこともある。

だからこそ、私はロイスと同じくらいジンの将来のことを考えている。

私は怯まず言葉を続ける。

「ですが、剣の腕はスワローが認めるほど。大会で活躍する姿を見れば、少しは叔父上の考えも変わると思うのです……どうか」

「——まあいい。貴様のこれまでの功績を考えれば、一度くらいワガママを聞いてやってもいいだらう。だが、特別扱いはいししないぞ。予選からなら認めてやる。そして、そこまで言っておいてあやつが大会で成果をあげられなければ、どうなるかわかっているな？」

「……………」

「ふん、沈黙か。それは了承と受け取るぞ。それと、出場を認める代わりにロイスは予定通り本戦から出場させてもらう。エイガ家の期待の星が、予選に出るなど恥だからな」

そして、叔父は部屋から出ていった。相変わらず、いや前よりもさらに傲慢ごうまんになっている——

「ふう、スワロー、壁の修理を行う職人の手配を頼む」

「はい。急ぐようにします」

「ああ、それと報酬に糸目はつけなくていい。それくらいさせてもらわないとな」

「ふふっ、わかりました。町一番の職人を雇いましょう」

私は壁に空いた大穴を見て、ため息を吐いた。

今回はスワローのおかげで助かった。優秀な執事を持てたことに感謝しなければ——



「なんだ貴様は。何しに来た？」

「……別に、ただもの凄い音が聞こえたので」

屋敷の中から強力な圧を感じたと思ったら大きな音がしたので、何があったのかと気配を追うと、父上の部屋から出てくる大叔父と出くわしてしまった。その顔には相変わらず、俺に対する嫌悪感けんおかんが見て取れる。

「何かあったのですか？」

「……何もない。壁が壊れただけだ」

「壁が？」

「貴様には関係ない。ふん、しかし忌々しいガキだ」

そう言い捨て、大叔父が俺の横を通り過ぎた。

俺にはわかっていた。先ほどの圧を発したのは間違いなくあの男だ。

大叔父は間違いなく嫌な奴だが、そんな奴に限って――

「それなりの実力者なんだよな。まったく、世の中ままならないものだ」

父上の魔法を見たことはあるが、正直そこまでには思えなかった。

だが、あいつの力は父上より確実に上だろう。口だけの男ではないということか。

兄貴を見ているとびんとは来なかったんだけど、魔法もなかなかのものかもしれない。

「あ、坊ちゃま……」

「スワロー」

続いて、父上の部屋からスワローが出てきた。彼女も中にいたのか。

気になって近づいた時……

「あ……」

「ちょ！ 大丈夫？」

スワローがふらつきバランスを崩したので、咄嗟に支えてあげた。

身長差の関係で、俺の顔にスワローの胸が当たって――いや、これは不可抗力だ！

スワローが姿勢を戻し、笑みを浮かべて言う。

「ジン坊ちゃま、申し訳ありません」

「い、いや、僕のことはいいよ。それより大丈夫？」

「はい。もう、大丈夫です。少し疲れが出たようで……」

疲れか……もしかしたら、俺がさっき感じた圧と関係しているのかもしれない。

すると、俺についてきていたマガミが心配そうに吠える。

「ガウガウ！」

「うん、マガミもありがとう」

スワローが頭を撫でたら、舌を出して気持ちよさそうにしていた。

「ところで坊ちゃま。武術大会の件、旦那様が出場の許可をタラゼド卿からいただきましたよ」

「へえ……」

あいつが俺の出場を認めたのは意外だ。

大会に出ることにはあまり気乗りしないんだがな。正直、騎士の道に興味はないし。

「武術大会に優勝しないと、騎士学園に入学できないんだったつけ？」

「――優勝だけでも限りません。ある程度は大会での戦い方も考慮されますし、決勝まで残れば

優勝できなくても道は開けます」

「そう……」

スワローは俺の質問の真意には触れてこなかった。もしかしたら俺が何を気にしていたか察しているのかもしれない。

そう、俺は騎士を目指している友人のデッキのことが気になっていた。

平民のデックはまず事前試合で勝ち残らないといけないが、これはおそらく問題ない。

そうなるかとは本番の大会だが——俺が出たら、デックが敗退するリスクが増えるんだよね。あいつの性格的に、俺が手加減することなんて望まないだろうし……

ただ、スワローの言う通り優勝者以外にも入学の可能性があるということなら——ふう、仕方ない。とりあえず出るだけ出るとするか。

「わかった。考えておくよ」

「……左様ですか」

「ん？ どうしたのかな？」

若干スワローの返事に違和感を覚えた。

「いえ、勿論ジン坊ちゃまならいい結果を残せると信じております。ただ、武術大会でよかったのかなと」

「……？ 僕は魔法が使えないし、大会に出るなら武術大会しか選択肢がないと思うんだけど」

「え、ええ。確かにそうですね。私も何を言っているのか。お忘れください」

「別にいいけど、本当に大丈夫？」

「はい。ご心配いただきありがとうございます。それでは仕事に戻りますね」

そしてスワローは執事の仕事に戻っていった。

しかし、大会か……兄貴は魔法大会の方に出るんだろうな。まあ俺にはどうでもいい話だけど。



「だから無理だって」

「ウホッ！ ウホッ！」

月日が流れ、いよいよ大会参加のために領地を出る日が近づいてきた。だからしばらく山に來られないとエンコウに伝えたんだけど、どうしても一緒に行きたいとワガママを言ってきた。

エンコウ曰く、自分としてご主人様のお側にいるべきだ、とのこと。でもそれは建前で、山の外に出てみたいという気持ちも強いのもかもしれない。

「けどなあ。エンコウの体格だと、一緒にというのは厳しいんだよ。だからわかってくれ」

「ウホッ！」

俺が諭すと、エンコウがドヤ顔を見せ胸をドンツと叩いた。何か手があるみたいな素振りだ。

「ウホウホウホウホッ！」

そしてエンコウは自分の胸を両手で交互に叩き始めた。

直後、エンコウの体が縮んでいく……って、え？ ちょ、ちよつと待て！

驚いたことに、エンコウはどんどん小さくなっていった。そして——

「……ウキッ？」



「ええええええええええええええええ!!」

思わず声を上げてしまった。いやだって、エンコウの奴、まさかこんなことができるなんて……

「お前、まるで子猿じゃないか……」

「ウキキィ!」

すっかり小さく変身したエンコウが元氣よく鳴き、地面を蹴って俺の肩に飛び移ってきた。流石にこれだけ小さいと軽いな。肩に乗られてもまったく負担にならない。

「ウキィウキィ♪」

エンコウが、今度は俺の頬ほおにすり寄ってきた。これは、か、可愛い。

「それにしても凄いな。いつの間にこんな技を身につけたんだ？」

「ウキキィ!」

エンコウが得意がり、指をピンツと立てた。

すると近くに落ちていた石が浮き上がり、正面の木に飛んでいって命中する。

「おお! 凄いなエンコウ!」

「ウキキィ」

えっへんとエンコウが胸を張った。

マガミは風を操れるが、エンコウも同じようなことができるんだな。しかしこれは一体なんの力なんだろう？

「ガウガウ！」

「ウキキィ」

凄く凄いと褒め称えるように吠えるマガミ。その背中にエンコウが飛び移った。そして二匹のじゃれ合いが始まった。まったく可愛い奴らだな。

「ウキッ」

「うゝん、そうだな。小さくなれるなら、一緒に連れていけるか聞いてみるか」

ま、これくらいなら上手く説明すればなんとかなるだろう。

◆◆

「それじゃあ先に出るよ」

「ああ、俺たちもあとから行くよ」

「まさか私も参加できるとは思わなかったけど、頑張りますね！」

数日後。エガの町に下りた俺は、デックとその妹のデトラと会って大会に出場することを伝えた。デックとデトラが張り切っているが、これは事前試合で二人が勝ち残って大会に出場することになったからだ。デックは残ると確信していたが、まさかデトラも残るとは思わなかった。なんでも頑張る兄の姿を見て、自分も可能性にかけてみたくなったんだとか。試合では植物を操る魔法を行

使っていて、実にデトラらしいと思ったな。

ちなみにデックは武術大会に、デトラは魔法大会に参加することになる。勝ち残れば、デックは騎士学園への、デトラは魔法学園への道が開けるわけだ。ただ、二人はさらに大会予選を勝ち抜かないといけない。ま、これは俺も同じだけどね。

「それにしてもエンコウちゃん……か、可愛い」

「ウキキィ♪」

エンコウがデトラの肩に飛び乗って頼ずりした。二人には、俺の連れている子猿がエンコウの変身した姿だと伝えてある。

それにしても……どうもエンコウ、女の子への興味が強い。

家族には事情を説明して、ひとまず納得してもらえた。その上で母上やスワローやメイドたちに可愛がられているが、男に関しては俺以外には素っ気ないのだ。

「それにしても、不思議だよな。エンコウってもしかして魔獣なのか？」

首を傾げながら言うデックに、俺は「さあ」と応<sub>こた</sub>える。

「父上はその可能性もあるって言ってたな。父上は興味を持っていたけど、俺としては別にどっちでもいいかな。エンコウはエンコウだし」

「そういうところがジンらしいよな」

デックがニヒヒと笑った。

こうして改めて見ると、デックは随分と背が伸びて体格もガッチリしてきたな。実年齢より二、三歳は上に見える。なんとなく、デトラも雰囲気が大人数に大人びて来た気がする。

「大会ではお互い頑張ろうな、ジン」

「ああ、勿論だ。デトラも頑張つて」

「は、はい！ どこまでできるかわからないけど、頑張ります！」

そして俺はデックやデトラと別れ、屋敷に戻った。

二人が大会の行われるタラードの町へ行くのはもう少しあとだが、俺……というか、エイガ家の人間は二人より先に出発する。大叔父への挨拶など、大会の前に色々やることがあるからだ。

それからその日のうちに出発の準備を済ませ――

「じゃあ、行ってくるね」

「はい。お坊ちゃまのご健闘をお祈りしております」

明朝、スワローに見送られた俺はエンコウとマガミを連れ、父上や兄貴と一緒に領地を出立したのだった――

## 第二章 転生忍者、大会に向けて旅立つ

「まったく、なんだってこんな愚弟と一緒に、大叔父様の町に行かないといけないんだ」

馬車の中、俺の斜め前に座る兄貴がそう愚痴った。俺だってお前と一緒に行くなんて願い下げだ、とも思ったが口には出さない。馬車が一台しかないのだから仕方ないしね。

馬車には父上も乗っている。エンコウは俺の頭の上で、マガミは俺の足元で大人しくしていた。

「ふん、大体なんで狼や猿まで一緒なんだ。馬車が狭くて仕方ない」

文句を言いながら、兄貴が馬車に用意されていたリングを手を取った。

「キキイ！」

しかし、エンコウが兄貴からリングを奪い、俺の方に戻ってきてシャリシャリと食べ始める。

「な！ おま、何してるんだ！ 返せよ！」

興奮して文句を言う兄貴を、父上が窘める。

「ロイス、大人しくしなさい」

「で、ですが、猿がリングを！」

「リングならまだあるだろう。しかし、人のものを取るのはよくないことだぞ」